



郷右近 富貴子さん(43)=アイヌ音楽家・口琴奏者

一ご家族は、みなさん工芸や音楽をなさるんですね。

私は阿寒湖で生まれ育ったので、親も周りも仕事としてやっている人ばかりです。夫は本州出身ですけれど、「ボロンノ」というアイヌ料理の店を釧路市阿寒町でやっています。昨年亡くなった祖母も、日高管内浦河町ですって女性の手仕事や歌を広め続け、私もいろいろなことを教わりました。

一富貴子さんといえば、アイヌ民族に伝わる20弦ほどの口琴、ムックリの演奏者として知る方も多いと思います。

阿寒で母や周囲の女性たちの演奏を見て覚えました。特に弟子シギ子さんのえいきょうを受けています。一海外でも演奏されますね。

シギ子さんと多くの先輩が、ムックリを通じてシベリアのサハ共和国と交流してきたんです。2011年に

は私もサハで開かれた世界口琴大会に参加しました。サハのみなさんと先輩たちの友情に感動しました。その後も姉と2人でスペインやキルギスタンに行き、アイヌの歌とムックリをしょうかいしてきました。一以前、ウェブ上にエッセーも書かれていましたね。

はい、声をかけていただいて何年か前に。阿寒での暮らしや子供たちと取り組んでいることを書かせてもらいました。このコーナーの読者のみなさんにも、ムックリの楽しさ、面白さをぜひ知ってほしいです。ムックリが北海道の楽器としてみんなに親しまれ、いつか一家に一つはあるようになって、みなさんと演奏できたら楽しいですね。

◇ このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

■トンコリ
アイヌ民族に伝わる弦楽器、サハリンに住むニヴフ民族やウイльта民族も使っていました。マツなどの木をくりぬいた上にうすい板をかぶせて作り、動物のけんやイラクサのせいでできた弦を張ります。弦の本数が3本や6本のものでありますが、現在ひき方が分かつているのは五弦のトンコリ。肩にもたれかけさせるか、左手でかかえるように

タンベヒヒラムヤイロ!
「きみ、これ知ってる?」の意味

にして演奏するのが一般的です。しかし、ギターのように指で弦をおさえないので、5本の弦から出る五つの音を組み合わせる曲にするのが特徴です。トンコリはソロでもひき、歌やおどりの伴奏にもなり、時に恋心を伝えるために演奏されてきました。その音色は繊細で美しく、現在さまざまな音楽に取り入れられています。(富野大喜・札幌大学ウレシバクラブ4年生)

見知らぬ男たちの無理難題におびえる村人



男たちの正体は古くなったトンコリ(楽器)でした。アイヌ文化の考え方では、どんなものにも必ずたましいが宿っています。この世での役割を終えたたましいは、カムイの世界へ帰っていきます。だから、使わなくなった道具などはわざとこわし、お供えとお礼をして、「もとの世界へお帰りください」とお願いをします。形をこわすことで、たましいは道具をはなれて自由になるのです。このようなお願いを「霊送り」といって、とても大切なことだと考えられてきました。ところが、霊送りを忘れたまま放っておくことがあると、道具たちは「使ってもらえない」と苦しみます。その気持ちが届かないと、やがて人々へのうらみとなり、とうとうお化けになって「私のこと忘れてなあい?」とせまるのです。みなさんの家にも放ったままの道具はありませんか。

役割終えた道具 感謝の儀式

お告げの通りに行動し、男たちの正体を明かす。男たちも解放された



男たちはよその家を訪ねるときの作法も守らず、いきなりズカズカと上がりこんで、大事なお客さんを案内する席にどっかりとこしを下ろしました。1人はとても大きな体で、目は血走って赤く光り、おそろしげな顔をしています。顔は赤く、手は真っ黒です。そして口を開き、「おまえに聞きたいことがあって遠いところからやって来た。私たちにはどういう先祖がいて、どういう親があつて生まれてきたのか、知っていたら教えてくれと切り出しました。ヤイレースーボは「そついうおまえたちも、私の先祖、私の親のこととは知るまい。だが、私はおまえたちの素性を知っているから聞かせてやる。それを聞きたいとて、村々をあらしてここまで来たのだから、私がいうことをよく聞け! おまえたちのことはトンコリだろう!」ヤイレースーボがそう言ったかと思つて、2人の男の姿が消え、座つていた場所に大変大きな古いトンコリがごろんと転がりました。ヤイレースーボはトンコリをおのてこなごなにくだき、木や草や土にわけあたえました。こうして2人の男たちによつて、村々が全てほろぼされてしまつたところでしたが、チリキヤンクフのおかげで、ヤイレースーボは自分の村、自分の郷を救ふことができたのです。

古トンコリの怪

樺太西海岸来知志の話

(更料源蔵「アイヌの民話」より)

これは樺太アイヌのお話。昔、オヤンルという村に、半分はカムイ(神様)、半分は人間のヤイレースーボという男の人が暮らしていました。ヤイレースーボとは「自ら育つた子」という意味です。ヤイレースーボには両親がいまませんでした。カムイに守られて1人で大きくなつたので、こつ言うのです。北海道東部に伝えられているサマイエクルや、西部のオキクルミのように、尊敬される男性です。さて、そのヤイレースーボが暮らしているところ、あるとき不思議なうわさが聞こえてきました。それはこんな話です。だれも見たことのない、化け物なのか人間なのかわからない2人の男が、あちこちの村に突然現れては、「私たちはどんな親を持つ者か、どこでどう生まれたのか、教へて」と自分たちのことを聞くのです。会つたこともないこの2人のことを、だれが答えられるでしょう。村の人々が困っている。「答へられないならこうだ」とばかりに村をほろぼしてしまつたのです。そつやつて、その男たちは村々をほろぼしては、また別の村に現れるというのです。

ヤイレースーボは、おそろしい2人組が、そのうち自分の村にもやつてくるのではないかと気がかりでした。

そんなある晩、ヤイレースーボは夢を見ました。ヤイレースーボのトレンペへ(守り神)であるチリキヤンクフというカムイのおじいさんが夢に出てきて、こつ言うのでした。「ヤイレースーボよ、私が言うことをよく聞きなさい。私は今日つれづれに海へ出た。「長い木は根元をかく、低い木は上をこえ」と歌い、風をまきおこしながら浜辺へ出て、海原を見わたしていた。すると、化け物の乗つた船が、おまえの村をめがけてやって来るのが見えたのだ。私の家の屋根にとまつている、金の鳥・銀の鳥もやかましく鳴いて危険を知らせている。あの船は明日にもおまえの村に来よう。もしも訪ねてきたら、私が教える通りにふるまいなさい。決してあわてず忘れず、教えた通りにして、村を守るのだよ」

ヤイレースーボの守り神チリキヤンクフ。危険に気づき、対策を教えた

